

7-3 ウエペケレ「ケソラプ カムイ イレス」解説

語り手：平賀さだも
聞き手・解説：萱野茂

萱野：私は二人の兄に育てられておった、一人のアイヌであります。アイヌと言っても、まだ本当に若い少年の域をちょっと出たぐらいの子供でありました。

兄二人に誘われて山へ働きにというよりも、猟に出かけて行っても、兄たち二人は、非常に足が速くて、猟に歩くその時にも、歩くというより、宙を飛ぶように、木の枝をかすりながら、木の幹に体をすりながらと言う風に、本当にもう、宙を飛ぶような山歩きをする兄二人に連れられて、毎日山へ、クマを捕りに、鹿を捕りに行き来して、なに不自由なく生活しておった三人兄弟でありました。

ある日のこと兄は、今日はちょっと遠い所へ猟に行くから、さあたくさん食べ物も背負いなさい、といい、そして兄二人に連れられて私も、肉とか干し魚なんかをどっさり、どっさりというより、一日、二日分くらいを背負って山へ行った。

ずーっと行くと、ある一か所の原野のような平地（たいらち）で、三人姉妹の女がそこで **turep ta** と言ってウバユリを掘っておった。そのウバユリ掘りをやっているところに行き、そして一緒に、「まあ、今晚泊めてくださいよ。」と言うような調子で、持って行った肉とか魚とかを食べさせながら、一緒にそこで泊まることにした。

そこで **turep kikkik** [ウバユリを打つ] という言葉が出ましたね、おばあちゃん？

平賀：はい。

萱野：これは、山で食う時は、どう？ たたいて食うわけかい？

平賀：そうです。あのねえ、山に……**turep kik** [ウバユリを打つ] と言ってね、**yar** [白樺の皮の入れ物] といってね、ガンビの皮でこしらった [作った] 籠のような形した入れ物がこしらうんですよね。

その中さ、木の棒っこね、直径 5 寸なり 6 寸の丸さの棒っこ置いてそこさこうやって、はたいて [たたいて]、はたいたらこなれる [どろどろになる] でしょう？ それを水の中に入れて澄ますと、下にウバユリのデンプンがたまるので、そのかすをこうやってすくって投げて、その澱粉を溶解して、水を取り替え取り替えして、やると、味が大変おいしい澱粉ができる。それを、**turep kik** [ウバユリを打つ] といって。

萱野：ああ、なるほど。山で急いでそれを食べるときには？

平賀：そうです、そうです。

萱野：なるほど。その、女の人たちは、**turep kikkik** [ウバユリを打つ] して食べておった様子なの。

いわゆる、今、おばあさんの説明のように、ウバユリのデンプンを、即製で山で採って、それを食料にしながらおった所へ、私達男が行ったので、まあ、肉を出し、魚を出しと言う風にして食べた。そして、夜そこで泊まることにして、一番上の兄の言う事には「二番目の弟よ」、いや、真ん中の弟。

今、自分で話をしておるのは一番小さい弟が自分で自分のことを話しておるんですが、まあ、真ん中の兄に「**yukar** せ [英雄叙事詩を言いなさい]。」って言ったら、一生懸命 **yukar** [英雄叙事詩] をする。

それを聞いて楽しんでおるところへ、何者かが、何かが山の方から来る。黙って足音を聞いておると、その足音によれば、熊らしいと。その熊が、出てきて、自分たちの泊まっておる小さな家の入り口に、体ようやく入れるのに入ってきたと。もう、その時はすっかり暗くなっておるんだけど、その暗くなる前に一番上の兄が伐って来てあったのは、**kanni** と言って熊とか何かをたたき殺す時に使う手ごろな棒を、

平賀：たたき棒！

萱野：たたき棒だな。それを切ってあった。それを一本一本自分たちのそばへ引き寄せてあった所へその熊が来たので、熊は、まあ、入っては来たのだけれど、全然危害も加える様子もなく、その兄の言う **yukar** [英雄叙事詩] を聞いて楽しんでおった。そのうち、楽しんでおったのを乗り越して、居眠りに入ったと。

そして、その、居眠りをしているところへ、そら、そら、と膝で合図し

あって、いきなり手元にあった **kanni** というそのたたき棒で、メチャクチャぶん殴りつけて、熊を殺したと。外へスポンとぶん投げておいて、次の朝になって、一番兄の言う事は、「これは、肉を食っても差し支えないだろう。」けれども、というわけで、「さあ、皮剥げ、皮剥げ」というわけで、皮を剥いだ。

そして、皮を剥ぐときに首だけスポンと切り落として、私、話をしておる一番小さい弟のところへ、ポンと投げよこしながら言うのに、「お前が捕ったものだから、お前がこの頭始末せ。」と、言われたので、どうしようかと思ったけれど、まあそう言われたら、そのままにしておくわけにもいけないので、適当な棒を伐って、それにポンとさして、頭の、いわゆる鼻先が真上、天井向くように、空向くようにして、「お前は、これから、空、每晚出る星を数えて、その星を何ぼあるか、年中それだけ数えていなさい。」と言う風に言って、そこへ、ポンと置いた。

そして、次の日は、まだ **turep** [ウバユリ] を掘っておる娘等と別れて、「来年の今日の日にまだ来るから。待っていなさいよ」と、言いながら、私たちは、村へ帰った。

そして、自分の家で住んでおり、そして、まだ一年経った日になったら、兄は「さあ行くぞ。」と、言うので、まだ、去年の場所へ肉や魚を持ってきてみると、そこでは、誰も来ておらないものだから、まあ、それにしても、そこで一晩泊まって、一地根越えて、そして隣の川筋に下りて行ったら、大きな家の屋根が一軒あって、そっから、人が住んでおるらしく、煙は出てるけれども、つい最近、このごろは男が熊を捕ったとか、そういう様子は、全く見られない。けれども、入って行ったら、りっぱな、ここでは、男だけだな、**huci** [おばあさん] の話は出ないな？

平賀： **huci** もいた。

萱野： ああ、そうか。りっぱな **umurek** [夫婦] だ。したら。

平賀： うん、**umurek** [夫婦]

萱野： 年とったご夫婦がおって、そこへ入って行っただと。

そこで入って行く以前に、情景描写は非常に細かく出ているんですが、まあ、そういうのを入れる時間はありませんが、その、入る前に外へ訪ねていざないを問うと、中の方から、そんな、人をいちいち入れるとか入れないとか言わずに、さあ入れなさい。と、言ったら、家の中では、ホウキ

がけの音もしながら、そして、私たちが、招じいれられたと。

そして、おじいさんに、いろいろ話を聞いたら、「家は、三人娘だけなんだよ。」と、言う風に言われ、まだ、そこでも、何日か滞在して、帰るときに、私一人、一番小さい弟である私だけが、その家に置かれて、そして、居た女のうち一人を連れて、兄二人と姉娘になる方を連れて、それぞれ家へ帰ってしまったと。

そのあとで、私は妹娘を嫁に持って、そして、その爺さんたちの食べる肉、魚、どっさり薪まで準備してから、嫁を連れて、兄のところへ遊びに行ったと。そしたら、兄たちは、非常に喜んでくれたんだけど、まだ、三人そろったら、「山に行くぞ。」と、まだ、誘われたので、山に出かけて行った。そしたら、この、ここに出てきた、**poro mema** ということ……、**poro mema** かい？

平賀：mema

萱野：poro mema ちゅうのは谷地原と。

平賀：谷地原

萱野：谷地原ですね。

平賀：そうごぞ……。谷地坊主やいろいろなものがある谷地原。

萱野：その、広い広い谷地原に来たら、なんか熊らしくもない、非常に恐ろしい、毛のモサモサ生えたあまり大きい体のものでもない、まあ、化け物みたいななんか獣がその谷地原で住んでおった。

その横に行って、まだ **kanni** というそのたたき棒を伐って、その化け物をも征伐したと。それから、まだ何日か、まあそこも細かく出ておるんですけども、その、**yaci poci** [どろんこの中でびちゃびちゃになって遊ぶ] している **wen kamuy** 悪い神様を三人で征伐した。

それからもう一つ、**wenkut or un** [ひどい崖に] **wen kamuy** まあその悪い崖に住んでおる、これは熊らしい表現、熊でもない？

平賀：これは熊でもない。

萱野：熊でもないね。

平賀：オオカミにもつかない。なんていうのかな。arsarus て言うんだけど。

萱野：なるほどね。

平賀：arsarus って言って、俺言い忘れたな。eynokuwen arasarus(?)、毛の一本も生えていない、しっぽの先っちょ、耳の先っぽにだけ、毛房が付いている。

萱野：なるほどね。なんかその、ちょっと今の言葉で言い表すことのできないような悪い神様が、崖のへりに住んでおった。そこへ、私が、その縄で胴の真ん中縛って降ろされて、そして、下りて行ったら、その穴のところから飛び出して、私を追いかけて、崖の上まで上がってきた。そこで待っておった兄と三人で、まだ、たたき棒で、それをたたき、そしてそれも殺したと。

そしてそれから、その本家である育った家へ帰ってきて、兄の言う事には、「私は人間であって、お前たちを育てたのではありませんよ」と。kesorap kamuy と行って、天の上に住んでおった、

平賀：クジャクの王様。

萱野：クジャクの王様であったんだと。けれどもアイヌの村を見たいので、ある日のこと、降りてきて、高い山の上から辺りを見ておると、お前の住んでおった村、これはなんだね？ topattumi [夜襲] でもない、何かで、

平賀：まあ、topattumi だね。topattumi だから、その家の者を殺される前に、子供らだけでもと思って、そうやって inawcipa kohokuste [祭壇を倒す] して。

萱野：そのなにか、いわゆる野盗というか、よそから襲ってきたものに、すっかり

平賀：悪者たちに。

萱野：そうね、悪者たちに殺されて、お前たち二人兄弟だけが残っておったと。それを、inawcipa と行って、アイヌの昔の生活の中で、

平賀：祭壇。

萱野：うん。外で窓のところからずっと見える場所である祭壇、いっぱいもう何年もやると、ちょっと柴原みたいに柴が重なっちゃうもんですが、その下へ二人を入れて、それを押して押し倒して、「これを育ててください。」と、言う風に言って、そのお前の父や母は死んでしまったのを見た。見たら、黙っていたら、お前たち二人は死にそうであったので、私はクジャクの神様ですけれども、それを見捨てるわけにはいけませんと。それで、人間に身を化わしてお前たちを育てたと。お前たちも一人前になったので、私は国へ帰りますから、どっさり酒を造って私を送ってくださいと。

このように言われたので、私の家内達、妻たちは一生懸命ヒエを搗いたり、アワを搗いたり、そして、どぶろくを造ったり、団子を作ったりして、お祝いをして、「まことに、長い間、ありがとうございました。」

で、次の朝になったら、ゆっくりでもするものかと思えば、夜の明け早々に外へ出て、本来の姿であったクジャクになって、舞い上がって行った。舞い上がって天国へ帰ろうとする、その下を私たち二人は、走りながら、「もう少しいてください、もう少し待ってください。」と、言いながらも、神ですから、神本来の姿にかえって、天国へ帰ってしまった。

けれども、「お前たちが私に会いたくなかった時には、できるだけ高い山の上へ上がって、そして、空を見ると、空から舞い降りてお前たちと会うこともできるでしょうと。だから、お前たちの舅も大事にしなさい。そのうちに、どこからともなく人が集まってきて、お前たちの村も大きな村になるであろう。」と、そのように、兄は言いながら神の国へ帰ってしまったわけだと。

それから、私たち村でだんだんだんだん人数も増えて、そして、兄に会いたくなると、高い山へ獵に行って、空を見上げると。最初のうちは、舞い降りて、やや近くに見えたけれど、そのうちに、ずーっと空の上へ、銀色に光った羽の一部が見えるぐらいになったと。けれども、いつまでもそういうこともできないので、だんだん山へ行くことも、兄に会いに行くことも少なくなったと。

けれども、私達兄弟は、あぶなく死ぬところを **kesorap kamuy** というクジャクの神様に育てられて一人前になり、もうこの歳になりましたと。子供もたくさん生まれて、もう、死ぬんですけれども、**kamuynomi** [神への祈り] と言ってお礼にお祈りをする神様にお神酒を上げるときは、第一番にその **kesorap kamuy** [クジャクの神様] に **kamuynomi** [神への

祈り] をする私達でございました。と、一人の男が語りました。

この uepeker [散文説話] の場合、ずいぶん長いですね。そして非常に聞くところも、いろいろな生活の中でのあれがよく細かく描写されておりまして、非常に、活字にするとか、そういうことなんかでも、こういう uepeker [散文説話] は良い uepeker。まあ、たまたまあるというのは、カラスに育てられた、狐に育てられた、kesorap [クジャク] という、今のそのそういうのに育てられたという uepeker もあるんですけども、これ、非常に良い uepeker です。

昭和 44 年 2 月 16 日に平賀さだもさんが語ってくれた uepeker でした。どうもありがとうございました。

フチ：兄さんも ye easkay [上手に言う]

平賀：ye easkay. makip ku=ye hawe akkari easkay hawe an. [上手だ。どうして私が言うより上手に言えるんだろう]